

アントワヌ・メイエ

## ゲルマン諸語の一般的特質

永 野 芳 郎 訳

### 訳者まえがき

この表題のものは、Antoine Meillet : *Caractères généraux des langues germaniques* (Paris 初版1916年, 修正版1930年: 252頁) を1949年の第7版にもとづいて, 部分的に邦訳したものである。

まず原著者について簡潔にふれておく必要がある。アントワヌ・メイエは1866年11月, フランスのムランに生れ, 1936年9月にシャトメヤンで没した。前世紀後半から今世紀前半にかけて, フランスのみならずヨーロッパにおけるインド・ヨーロッパ比較言語学界に君臨した巨匠である。精密な比較方法を駆使して, 印欧語の原始組織を解明した。また他方では言語事実の社会的性格を強調した。1891年にはパリの高等学術研究所 (École des Hautes Études) の印欧語研究主任となり, 1906年にコレージュ・ドゥ・フランス (Collège de France) の教授に任じられた。1903年には大著「印欧語比較研究序説」 (*Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*) をあらわした。これは印欧諸語の親族性を, 当時最新の情報を用いて, 祖語 (または基語) と関係づけて明らかにしたものである。これとほぼ同じ頃, 彼は古典アルメニア語やスラヴ語に関する貴重な研究書を出した。彼の驚くべき多言語精通力によって, さらにゲルマン, バルト, ケルトの諸言語に関する学術上の寄与が発表されたのみならず, 古代イラン語の文法 (1915年) やギリシア, ラテン両言語の歴史的研究の著作 (1913年および1928年) も登

場した。また多数の論文では、語の意味変化ならびにその他の言語現象を、社会的事実に関連させて説明したことも特筆しなくてはならない。

こうした学界における活躍によって、メイエが生前に残した著作は30冊近くもあり、今ではそのどれもが珠玉の古典的存在となっているが、邦訳は今のところ残念ながら、わずか2冊にとどまっている。彼の死後しばらくして第2次大戦がはじまり、戦後はアメリカの「新言語学」がすっかり日本を風びしてしまったためであろう。しかしながら、メイエやその後継者たちによって、一層磨きをかけられた歴史的比較文法の重要性は少しも失われてはいない。日本語そのものをふくめて、系統未解明の言語が多く残されている現状を見るならば、斯学の任務の重大さが痛感されよう。

ところで、英語やドイツ語などの個別的研究は盛んであるが、この両言語をはじめとして、オランダ語や北欧の諸言語によって構成されるゲルマン語派 (le groupe des langues germaniques) を、まとめて全体像でとらえようとする研究書は、特にわが国では殆んど無にひとしいといってよい。これらの言語を横軸の関連で展望しようとするならば、必らず印欧語族の構成原理という、縦軸の統括的知識が不可欠の基礎として要求されるのである。今ここに部分的ではあるが、訳者が邦訳を企てたメイエの原書は、彼のような碩学によってのみ達成されたものとして、今なお大いに評価されるべきものである。個々の言語の研究も勿論大切ではあるが、数多くのヨーロッパの言語のように、同系性という視点から可能な研究は、わが国ではもっと注目され、実行されてしかるべきであろう。訳者は一人のゲルマニストとして、この書物には早くから着目していたのであるが、訳者の上述のようなささやかな願いが、下掲の拙訳を通して、いささかなりとも認められれば幸いであると思う。なお、原書において重要な部分を占める音韻関連の箇所は、全般にきわめて専門的であるので本意ならずも割愛し、より一般論的な部分だけを訳出することを意図した。

## 序 説

ゲルマン語派はインド・ヨーロッパ語族の一部を形成する。しかしこの語派はその中であって、まったく特有の様相を呈する。

インド・イラン語派、ギリシア語、ラテン語、ケルト語派、スラヴ語派のように、いわゆるインド・ヨーロッパ（祖）語という一つの共通の源から、様々に変化したすべての言語には、「インド・ヨーロッパ」（以下略「印欧」）という名称を冠することになっている。

これらの言語が共通の源をもつことは、多くの点での対応によって認められる。しかもこうした対応に注目することによってこそ、種々の印欧諸語の未確認とはいえ、共通の原型を仮定的に、しかし確実に我々は再構することができるのである。印欧諸語の比較文法は、このような対応の理論の設定を第一の目的とする。

しかし、この一群の諸言語の文証上の形では、対応する諸特徴は遺物的なものでしかない。もっとも古くから文字に固定された方言においてさえ、これらの言語のどれ一つとして、かつての印欧（祖）語の構造を、正確かつ完全に想起させるものはない。ヴェーダ (Veda)<sup>1)</sup> やアヴェスタ経典 (Avesta)<sup>2)</sup> の『讃歌』(gāthā) は、もうすでに十分にインド・イラン語のタイプを示している。つまりヴェーダはインド語的な姿を、ガーサーはイラン語的な姿を呈しているのである。そしてホメーロスの詩は完全にギリシア語でできている。ところで、これらは印欧諸語の中でも断然最古の、しかも最も古めかしい記念物なのである。

最古の時代以来、この一群の言語はそれぞれ固有の体系をともなって出現する。その体系を構成する要素は印欧語のものである。しかし体系は新らしい。したがって各言語を吟味して、それぞれに特有のものをはっきりさせるのが適切である。

実際に生じた変化にこだわってはならない。既に起きた変化は、言語の歴史をたどる出発点として役立つかぎりには、興味をひくものではある。しかし、

まず何よりも探究に適するものこそ、発達を左右する傾向である。いうならば、変化の能動的原理を認識することが必要なのである。印欧語のある状態に対しては、ある言語が別の状態でもって対応する、といったことを確かめるだけに人々はとどまりすぎているし、また往々にしてそうなのである。変化が生じるのは、ほとんど常に大きな傾向のためである。こうした傾向はその出現以前から働いていて、はじめて現われた後も長い間作用し続けるものである。変化をその発生のもととなる傾向に帰することが必要である。おそらく、その作用の細部は人々の注意からそれるであろう。しかしながら全体的な大筋の方が、細部よりは重要なのである。

言語の受けた改新が本質的なものであって、さらに体系全体に影響すればするほど、言語はこの視点から観察することが、ますます興味ぶかいものとなる。ゲルマン語は印欧語の体系を解体し、新しい発音、新しい文法をみずからのものとしたが、印欧語の要素は求められるだけのものを保有している。要するに、これは印欧語と異なってしまった言語である。この語派の改新の原理を明確にすることなく、ゲルマン語の細部諸要素の印欧語起源を明らかにしようと腐心するような言語研究は、凡庸な好奇心の域をいつまでも脱するを得ず、本質をかえりみぬこととなる。

事象の細部はできるだけさておいて、ゲルマン諸語の発達の大きな特徴をここで指摘することにしよう。ここで考えられる発達はゲルマン語が文字となった記録によって、その存在を立証される時代よりも遙か以前に始まっていたものであり、大部分は有史時代になっても止むことはなかった。少なくとも部分的には、まさにこの傾向は現在までも働き続けていて、印欧諸語の中でも独特の様相をゲルマン諸語にあたえている。先史時代の事象と、それ以後の時代の事象とを切り離してしまうと、同一の傾向に依存する出来事がしばしば解離されることになる。最古の文献時代には発達途上にあり、しかも文字に固定された時よりも前に生じはじめていた数々の事象は、ようやく後になって、しかもそのあるものは全く新しく実現したにすぎない。変化への若干の傾向は今なお効力を生じ続けている。我々が明確にしようと思うの

は、この傾向なのである。

最古の記録が示す形においても、また発達の傾向からしても、ある特定の改新をあらわす印欧語がゲルマン語と言われるのである。こうした共通の改新ならびに傾向は、数多く特徴的なものであり、いわゆるゲルマン諸語が、印欧語の呈するある特殊な形から、変化したものであることを予想させる。我々が「共通ゲルマン語」(*germanique commun*)と呼んでもよいものがこの言語である。この共通語は種々のゲルマン語の比較によってのみ、認められるにすぎないので、ロマン諸語の土台をなす「俗ラテン語」(*latin vulgaire*)を「実在のものとする」ようにはゆかないのである。

このように名づけられる言語がどこで、またいつ話されていたかを、究明することは差し控えよう。場所としては、ヨーロッパの中央部——たぶん北ドイツの平野部を考えねばならぬであろう。また時代としては、キリスト紀元のはじめをさかのぼること2ないしは3世紀あたりを考えると、ほぼ間違いはないだろう。といっても、歴史的なデータが十分でないので、明言しようと試みるのは軽卒というべきであろう。

ゲルマン諸語は三群に分かれる——ゴート語群、スカンディナヴィア語群および西ゲルマン語群である<sup>3)</sup>。

ゴート語群は確かに重要なものであった。しかしゴート族は征服心にかかられて、その故地から遠くへ離散してしまった。彼らはスペイン、フランス、イタリアおよびバルカン地方に王国をきずいた。彼らは遠くまで冒険を試みて輝かしい成功を収めたあげく、諸地方の住民の中に溶けこみ、しばしの間ながらも覇権を握った。彼らの言語もそのようにして各地で消滅した。16世紀には、クリミア地方でまだ残存していたゴート語のある方言から、若干の単語が採取された。しかしその地においても、ゴート語は使われなくなった。この言語の方言を用いる住民は、今どこにも生存していない。もしゴート人の僧正ウルフィラ (*Ulfila*) がゴート文語を基礎にして、キリスト教聖書を

4世紀に翻訳することがなかったら、そしてもしこの翻訳の重要な断片、特に新約の断章のみならず、同じ言語で書かれた幾つかの断片も保存されていなかったとしたら、ゴート族の首長たちの固有名以外は、ゴート語のことは何一つ知られなかったであろう。したがって、我々がゴート語というときは、ウルフィラ僧正が文字に固定した言語のことを常に意味するわけである。ギリシア語の原典にもとづいて、バルカン半島でなされたので、この翻訳は近東語的な特徴を有している。その作者はゴート語の音韻を表記するために、一種のアルファベットを作った。形が整って、常に書体の変らぬものを案出したのである。あらゆるゲルマン諸語の中で、ゴート語ほど形の整ったものはない。というのは、ある特定の時点で、ある特定の方言に基づつつ、一人の教養ある人士が作りあげた文語だからである。

ウルフィラのゴート語は文字にしるされた比較的古い時代にふさわしく、ゲルマン諸語の中で最も古風な一つの形を示す。とはいえ移住・征服民族の言語であるゴート語は、4世紀の当時までは比較的進化した方言であった。同時代の他のゲルマン諸方言の多くは、もっと保守的だったからである。スカンディナヴィア語群や、もっと後代の西ゲルマン語群の文献に、まだ広く用いられていた幾つかの古いゲルマン語の特徴を、4世紀のゴート語はすでに拭い去っていたのである。

スカンディナヴィア語群はまた北<sup>ノルド</sup>欧語群ともいわれ、現在まで維持されていて、最古の記録で示される三方言はノルウェー語（ならびにアイスランド語）、スウェーデン語およびデンマーク語という現用語の形であらわれている。

この三方言にはルーン・アルファベット（alphabet runique）という名称で知られる、ゲルマン民族固有の文字で書かれた碑文がある<sup>4)</sup>。最古のものは多分紀元後3世紀のものであろう。ところでルーン・アルファベットの使用は長い間維持され、13世紀までまだ絶えることはなかった。古いルーン文字碑文は大部分が短かく、また往々にしてわかり難い。それらが言語上の証

抛をもたらず限りでは貴重である。というのは紀元後4～5世紀のノルド語は、非常に古風な特徴を保存していたためであり、また初期のルーン文字碑文の言語は、断然共通ゲルマン語に最も近いものだからである。これは同時代のゴート語よりも著るしく古風である。語尾はよりよく保存されている。たとえば、ゴート語で主格 *gasts*「主」<sup>あるじ</sup>（単数）となる場合、ルーンの古期ノルド語はまったくラテン語 *hostis* と同様に、*-i-* をふくんだ *-gastiR* をまだ有している<sup>5)</sup>。またゴート語で対格 *stain*「石」（単数）が語尾を完全に消失しているのに、ルーンの古期ノルド語では *staina* である。

11世紀を過ぎると、スカンディナヴィアの三つの主要方言には写本があらわれる。

ノルド語諸方言のうち確立された最初の本格的な文語は、ノルウェー人の植民地アイスランドの文語である。12世紀から14世紀にかけて、その地には雄大な文学が存在した。したがって、古期ノルド語として最も普通に引用される形は、この時期のアイスランドの文学作品の写本が示す形である。これは古期アイスランド語と呼ばれているものである。

西の一群は北欧の一群よりも統一性が少ない。これに含まれるのは、きわめて近似したフリジア諸方言をともなう英語の一派と、高地ドイツ語、低地ドイツ語またはサクソン方言およびオランダ語に分かれるドイツ語の一派とである。

これらは最初の文証が最も新しい一群である。古期英語は7世紀以降、古期高地ドイツ語は8世紀以降、古期サクソン語は9世紀以降はじめて、それも最初は語彙集 (*glose*) によって認められるにすぎない。

その上、古代の間じゅうこの語群は、その領域のどこにも一つのまとまった文語を築くことはなかった。イギリスでは文献は言語的に多種多様な形を示す。古期高地ドイツ語はといえば、これほど単一性に乏しいものは他にない。同じ外観を呈する二つの文献は殆んどない。アレマン方言、バイエルン方言およびフランケン方言で書かれたもの相互間の開きは甚だしい。他方で

はどのような伝統も定まっていなかったもので、作者も筆写生もそれぞれその時代、その地方の言語の状態をある程度考慮に入れた。したがって古期高地ドイツ語という名称は、8世紀から12世紀にかけて、高地ドイツ地方で特に僧院で書かれた様々の形に対して適用され、また同様に古期英語という名称も、7世紀から12世紀までイギリスで使われた諸形に適用される。これらの場合ゴート語の単一性、あるいは古期アイスランド語の単一性にすら比すべきものは全く存在しないのである。

こうした事態は西ゲルマン語域で、学術上の書き言葉がラテン語であったということに帰因する。ゲルマン語諸方言は、最初ラテン語に註解をつけるためにだけ書かれたにすぎない。

このような三群がどこで、またどのようにして形成され、各々境を限るようになったかを明らかにするには、各種の正確な資料が欠けている。ゲルマン語の話し手たちはきわめて行動的で、征服心に富んでいた。それで彼らが史上に登場したとき以来、その領土拡大をはかっているのである。したがって、有史時代のはじめにその三群によって占拠された土地においては、大きな分け前の獲得物のみならず、これら三方言の使い手たちの間に同化した多数の住民も、その結果ふくまれることになる。

各方言の古い時期では、言葉の表記のしかたは明らかに率直である。だからルーン文字碑文によって、そしてゴート語やスカンディナヴィア語、あるいは西ゲルマン語などの最古の記録によってゆだねられた形は、一般に信頼できることになる。保存されている最初の文献は、ゲルマン語の各方言がはじめて文字に書きしるされた時点に近い状態のものである。

実際にゲルマン人は宗教的な事柄を記録しないような、印欧的な慣例に対しては長い間忠実であった。そういうわけで、古いルーン文字碑文は世俗的または魔術的な性格のものである。これらは大部分が墓碑銘である。近東の言語の慣用法にならって聖書翻訳の行われたゴート族の場合にせよ、教化的な作品が書かれたドイツとイギリスの住民の場合にせよ、現存する最初の



記録はキリスト教的なものである。古期高地ドイツ語の記録は修道院の文学である。アイスランドの叙事文学は、キリスト教への改宗が達成された時代からはじまる。おそらく古代ゲルマン人の場合、文字はやっと遅ればせながら入って来たであろう。その場合求められる重要なことがあった。ゲルマン人が文字を知る民族と接触することである。こういうわけで、ルーン文字碑文も、初期のあらゆるキリスト教的な記録も、彼らの古代文化の痕跡をはっきりと留めてはいないのである。

各地、とりわけ西の領域では、ゲルマン方言の古い表記法がまじめで率直なのが幸いであろう。不幸にして24文字からなるルーン・アルファベットでは、略式で不完全な表記しかできなかった。そしてゲルマン語諸方言の発音にうまく適さなかった、ラテン語アルファベットの助けによって行われた表記も、ぎこちなく一貫性がない。ひとりゴート語だけが規則的に、そして熟慮して書きあらわされたにすぎない。

方言形が多様なために、「共通ゲルマン語」のありえた姿について、我々はかなり完全な概念を得ることができる。実際、種々の方言の最古の記録から文証された諸形を比較してみると、ゲルマン諸語が有史時代のはじめ急速な変化の状態にあって、その後も速く変化し続けたという見解を、我々は決して捨てることにはならぬであろう。初期のルーン文字碑文とゴート語が示す事態から判断すると、共通ゲルマン語は非常に古風であった。印欧語と比べると、多くの主な改変がすでに実現されていた。しかしその他の多くの改変はまだ始まったばかりであった。言語を根本的に変えることになる傾向は存在した。といっても、その実現は目に見える程まで完全には達していなかった。

諸方言の比較によって再構可能な共通ゲルマン語形は、最古の文献上の形と大幅に異なることが多い。たとえば主格形で、ゴート *stains*, 古アイス *steinn*, 古英 *stān*, 古サク *stēn*, 古高独 *stein* 「石」をとりあげるとする。*stainaR* というルーン・ノルドの形と、ゲルマン語からフィンランド語への

古い借入語（たとえば古サク kuning に対してフィン kuningas「王」）との比較から、共通ゲルマン語形としてどこにも存在を立証されないが、\*stainazを指定することができる。ゴート語とフィン借入語は -R を排除する。これはルーン・ノルド語の語末子音だからである。ゴート語の一定の事実から、ゴート stains の -s は古い\*-z をあらわすことがわかる。これによって再構形は\*stainaz となる。こうして再構された語尾\*-az は、まさに我々の期待するものである。なぜならそのゲルマン語再構形のタイプが依拠する印欧祖語の変化語尾は\*-os（ギリシア -os, 古ラテン -os）であり、印欧\*o はゲルマン\*a, 印欧語末の\*-s はゲルマン\*-z として、それぞれ再現するからである。共通ゲルマン語としての再構形\*stainaz は、ゲルマン語と印欧語との対応の一般法則が予想させる形と一致する、ということから立証されることになる。

少なくともキリスト紀元の数世紀以来、ゲルマン語の諸方言——ゴート語、スカンディナヴィア語群および西ゲルマン語群は各々個別に発達した。そしてやがて間もなく、各々の群は大きな方言の内部で、それぞれの自律性をもつようになった。たとえば英語諸方言の発達、アングル族やサクソン族などの征服者がイングランドに定住して以来、ドイツ語諸方言の発達とは無関係になった。

当然予期されるように、出発点も同じであり、共通ゲルマン語から受け継がれた傾向も同じであるため、種々のゲルマン諸語の間には類似の発達が生じた。こうした発達はたがいに無関係なので、細部ではしばしば違った結果に至ることがある。こうして\*stainaz のような同一の共通ゲルマン語形が、いかにして各方言で変化語尾縮約（また同様に第一音節の ai に関しては二重母音の変化）への傾向が働いて、ルーン・ノルド stainaR（これより古アイス steinn が由来）——ゴート stains——西ゲルマン\*stain（これより古英 stān, 古サク stēn, 古高独 stein が由来）を生じたかはすでに見たとおりである。

それにもかかわらず、共通ゲルマン語時代を過ぎると諸方言の類似した、しかし無関係な発達が同じ結果をもたらすことがある。たとえば共通ゲルマン・単数・対格 \*stainan 「石を」はゴート stain, 古アイス steinn, 古英 stān, 古サク stēn, 古高独 stain となる。もしルーン・ノルド語の staina がなかったとしたら、この形で語末母音が脱落したのは共通ゲルマン語時代と、各方言で最古の記録が現われた時代との間にほかならぬ、ということを我々はじかに立証できないであろう。

共通ゲルマン語形の再構が確実に立証された、どのような形にも基かないことが時々ある。たとえば共通ゲルマン \*stainan では、語末の n は想定されたものである。

前ゲルマン語の語尾が \*-on であったことは、ギリシア -on, 古プロシア -an, さらに古ラテン -om, サンスクリット -am によってわかる。しかしこのタイプに属する名詞の、どのような文証上の形も、この鼻音がまだ共通ゲルマン語に保存されていたという直接の証拠をもたらさない。我々がこの仮定を最も蓋然性の高いものと考えたくなるのは、次のようなことによる——指示詞の場合、たとえばギリシア・対格 tón, サンスクリット (同) tām 「これを」に対応する形では、鼻音が維持されていること、つまりゴート語ではそれは小辞 -a の前で pan-a のように存続したこと。また古期高地ドイツ語では単純形 den が、単音節的であったという理由だけで、それを保存したこと。このように共通ゲルマン語形の再構には、時としてある程度の不確実性をともなう。

その上、共通ゲルマン語は完全な統一状態を形成していなかった。おそらくゲルマン語のまとまりは印欧語とくらべると、共通の改新とこれに至る共通の傾向を数多く示すので、その言語的統一性を認めざるをえなくなるのであろう。それはともあれ、言語的統一性は画一性の意味ではない。

画一性は古い印欧語では大してありそうもないことだったのであろう。言語的統一状態は実際には、ある民族の単一性をあらわす。したがって共通ゲル

マン語の統一性というのは、キリスト紀元前のある時代に統一意識を有するある民族が存在したが、みずからに与えていた名称は知る由もないので、この場合ゲルマン民族と呼ぶことにしよう——という意味である。ところで古代印欧民族には、一つのまとまった制度も戒律もなかった。この民族は諸部族の集合体から成り立っていて、各々がそれ自身の慣習と首長とを有していた。こうしてゲルマン民族が史上に姿を現わしたのは、ただ一人の首長にひきいられた一国民としてではなくて、近隣の者たちが統一を意識した諸部族の一集団としてである。彼ら自身はたがいに親類同志だと思ってはいたが、政治的な統一を少しも形成することはなかった。このように、たがいに独立した原住民集団は厳密な意味で、単一の言語をもつことはできなかったのである。ゲルマン人たちが冒険を求めて各地に四散する以前に、すでにゲルマン語が方言的な違いをもっていたことは確かである。

文証上のゲルマン語三群を比較すると、共通ゲルマン語に存在した、このような方言差の幾つかを垣間見ることができる。たとえば強変化動詞の直説法過去・単数・2人称では、「あなたは命じた」はゴート *baust*, 古アイス *bautt* であるが、古英 *bude*, 古サク *budi*, 古高独 *buti* である。ここから互いに相容れない二つの異なったタイプができる。すなわちゴート語とノルド語では語尾は *-t* であり、単数のその他の人称の場合と同じ語幹母音をもつ。西ゲルマン語では語尾は *-i* であって、複数形の場合と同じ語幹母音を有する。この二つの形は異なった印欧語のタイプにさかのぼる。ゴート語とノルド語はそのうち一方を普及させ、西ゲルマン語は他方を一般化した。この相違は共通ゲルマン語時代にまでさかのぼるはずである。ここにおいて、ゲルマン語方言群の間の境界線が予見される。

この種の主な線は一方ではノルド語とゴート語、他方では西ゲルマン語との間を通っている。したがって、ノルド語はゴート語の一群とたがいに似ていたのに反し、西ゲルマン語群はゴート語ともスカンディナヴィア諸語とも対立していたように思われる。といっても、この結論をあまり促進してはならない。この種の事象は数が少なく、重要性も小さいからである。かといっ

て、ゲルマン語の方言群を二つに帰するのは正しくないであろう。ゴート語は十分にノルド語とは別の存在なのだから。

現在話されているゲルマン諸語が、何世紀もの遠い以前から互いに個別に発達し、その変化が殆んど一度も急速状態を止めず、またある時には急激になることさえあるので、この諸言語は今では互いに異なったものとなっている。しかし類似の傾向は全てに支配的であった。ドイツ語、オランダ語、英語は今日では全く違った言語であり、デンマーク語はスウェーデン語やノルウェー諸方言とも大変異なっている。これらの言語が、共通ゲルマン語および印欧語のタイプから遠ざかってしまった度合は様々である。しかしすべては同じ方向に変化したのである。

発達の極限は現代英語において見られる。古い変化語尾は殆んど一つも残らぬまでに縮小した。ただ一つ語の強勢部分だけが残存している。したがって印欧語の古い形態法は消滅したことになる。自分たち以前の者と同様な話し方を続けたい、という気持や意欲を常に抱いてきた絶えることのない多数の人々によって、印欧語に断絶しないで結びつけられている限りは、現代英語は一種の印欧語である。しかし言語のタイプ自体のことを考えるだけで、また現実とは別の歴史的事実である連続性ということを考慮しなければ、今日の英語——あるいはデンマーク語——ほど、印欧語のタイプからかけ離れたものは他にないのである。もし我々が現代英語のことを考え、そのすべての過去を忘れて、英語が印欧系の一言語であることを証明するとなれば、それができるのは辛うじてのことであろう。

ここでは或る何かのゲルマン語の、特定の発達をたどる試みはしないでこころ。それよりもまず、英語やデンマーク語の場合のように、印欧語の殆んどすべての痕跡が消失して、ある新しいタイプの言語を眼前にする点にまで、ゲルマン語の発達が印欧語のタイプから常に遠ざかって行くことにあった、ということをよく注意しておくのが大切である。

この種の進行性の変化を決定づけた条件が何であるか、を正確に知る手段

を我々はもたない。言語学者は諸事象を確かめ、その発達をたどり、諸変化の生じる過程を確認し、これらがどのように継起し、またどれ程しばしば互いに惹起しあうかを見る。ところが、諸変化の原因たる傾向の起源は、当人の注意からそれるのである。

いくつかの変化の原理は普遍的である。例として、変化語尾は縮約する傾向がある。母音間の子音は近接母音の影響をうけて有声化したり、その口腔通路の閉じ (fermeture) を部分的に失う方向に近づく。あるいは文法に関しては、印欧語の屈折の豊かな複雑さは単純化へと向かう。このようなことは我々には目新しいものではないであろう。これらはまさに普遍的傾向である。程度の差こそあれ、そうした結果は印欧語族のあらゆる言語に見出されるからである。この点からすると、ある言語で特殊なものといえ、こうした傾向が働く際の多少とも大きな速度、および変化の質料的な細部でしかない。

しかし或る言語にだけ特殊な傾向もまた存在する。ゲルマン語の音韻は、それを顕著に特徴づけるこの種の傾向を幾つか示す。子音組織、母音の扱い方、強勢の性質と位置などは、ゲルマン語が印欧語から独特な異なりかたをする際の諸特徴である。

さて、ある居住民集団が言語を変えるとき、彼らの採用する新しい言語の中に、それ以前の言語的習慣を多少とも保持するか、または採用するタイプを変更しがちである。印欧語の慣用法と、あれほどきっぱりと縁を切ってしまったゲルマン語とは、ある新しい居住者集団によって話されるようになった印欧語である。彼らはこの言語を採用したが、そのとき部分的に新しいやり方で、それを発音するようになった。印欧語をもたらした征服者たちは、彼らの調音様式を押しつけるにはさほど数多くもなく、さほど強大でもなかったであろう。彼らに征服され、彼らの言語を採用した人々は、それまでのものとは違った調音タイプと、新しい傾向を優先させたのである。

文法体系の根本的な改変もまた、ゲルマン語となるはずの方言を採用した新しい居住民たちが、印欧語の文法的手順を完全に同化吸収しなかったこと

に多分起因するであろう。この文法的手順は風変りで、複雑であった上に習得も難しかった。だから印欧語民族の住みついた地域全体では、それが順次削除されていくことがわかる。印欧語のタイプから、その最も固有な特徴を除こうとする動きは、ゲルマン語の場合ほど著しいものは他になかったし、また同様に印欧語の調音タイプが、これほど完全に変形したのも他にないことである。

変化の大きさと速度は、新しい言語を受け入れる際、以前の習慣の維持にもとづくだけではない。新しく採用した言語の最も固有な特徴があまりにも微妙なので、よく感じとれないというだけで、うまく同化されぬこともある。その上、種々様々な人々が新しい言語を習得する仕方は同じではないから、言語共同社会には大きな多様性が生じる。この多様性に対する反作用は必ずある。この反作用は特異性を消去することによって正常化し、したがって平凡化しようとする。

ゲルマン語派では言語の保存力は可能な限り小さく、長い間微妙であった。まとまって安定した居住者集団では、言語は一般に安定性を帯びる。すべての人々がかなり同じような話し方をしている場合には、各人は一般的な用法に合わせようと思うから、個人的なあらゆる逸脱は非難と嘲笑をうけるのである。ところで、ゲルマン語を話す住民は、歴史上に出現して以来このかた征服者であった。冒険心にはやった者たちは、進んで他民族の中に溶けこんだ。これはすべてのゴート人、フランスに進出したドイツ人、そしてアイルランド、ノルマンディーあるいはロシアに歩を伸ばした北欧人、さらにその他の人々にも起きたことである。もっと不屈な人々は定着先の住民に彼らの言葉を押しつけた。これは特にイングランドで起きたことである。この種の征服には言語的画一性が殆んど附随しないから、変化に対する抵抗力は最小の不安定期である。

知的な支配階級によって維持される固有の国民文明は、言語の理想を固定しつつ古い型の保存に貢献する。ところで、ゲルマン民族はより進歩した文明であるギリシア・ローマ文明に遭遇した。しかも彼らはキリスト紀元の始

めよりも前から、その影響を強く受けてきた。彼らの中には進んでローマ軍の兵役に服した者も多かった。その民族文明には外異の諸要素が浸透した。ルーン文字は大体において、この民族には固有なものではあるが、北イタリアが発祥の地であることは、マシュトランデルの見解のとおりである<sup>6)</sup>。ルーン文字はキリスト教が伝えられると衰えた。次いでギリシア語とラテン語が学術語となったので、ゲルマン語諸方言は日常の用にしか供されなかった。

真に統一された帝国は、その手段として役立つ共通語をもつようになる。さて、ゲルマン諸部族の中には征服を行ったものもあった。ゲルマン王国も存在した。しかしほとんどは長続きせず、束の間に次々と交替した。歴史はどんな時点でも、ゲルマン帝国なるものを見せてくれない。ゲルマン人の征服者のうちで最も偉大なカルル大帝（仏名：シャルルマーニュ）の出現は後代のことにすぎない。彼が当時のゲルマニア全土を、その権力のもとに統一するなどといったことは及びもつかなかった。そしてジュリアンも認めるように<sup>7)</sup>、大帝が保護し成長させた文明はゲルマン語のそれではなかった。カロリング王朝の復興は、人も知るごとくラテン語研究の復興であった。すでに甚だしく分化してしまった諸部族の言語が、9世紀から14世紀にかけて固定される時まで、ゲルマン語を話す居住民たちは文明語をもたなかった。ゲルマン諸方言は平俗の用、つまり日々の社会的交際の用に供された。それらには学問的伝統によって維持された規範がなかった。フランス語が宮廷、貴族および文人の言語だったノルマン王朝の支配時代に、英語が変化した速度は、理想的規範を失った言語が、どれほど変化しうるものかを示している。

文語が確立されるようになって、中世時代では学問的な言語とはならなかった。なるほど詩作には用いられたが、特にイギリスとドイツでは日常の方言には微弱な影響しか及ぼさなかった。

我々はこれからどのような方向に沿って、印欧語が変化して共通ゲルマン語になり、ここからゴート語、ノルド語および西ゲルマン語のタイプに移行し、この最後の二つが現代ゲルマン諸語のもととなったかを示そうと思う。事件によってとぎれること度々ではあったが、この発達線はやがてわかる



ように、全体としては一つの明瞭な連続をあらわす。

ゲルマン語の諸方言の中に、印欧語を見出すことが問題ではない。それとは逆に、いかなる点でゲルマン語が独特のものを示すことが、この小さな書物の目的なのである。ゲルマン語を作っている素材は印欧語である。しかし言語の設計図は新しい。実を言えば、印欧語族の各言語は史上に姿を現わしたときは、すでにそれ自らの特徴をそなえている。しかし、ある印欧語がいかに新たな創造物となったか、そのためにいかに興味をすら起させるものか、はこのゲルマン語において他に見られないのである。

## 語 彙

### 1. 古い借用語

ゲルマン語が他の印欧語諸方言から分かれたときと、最古の文献が文字に固定されたときとの間に、ゲルマン語は数多くの外異の語を取り入れた。

おそらく非印欧系であろうが、どのような言語から借用が行われたかはわからないが、こうした幾つかの語は他の印欧諸語にも見出される。

たとえば「銀」という語はスラヴ *širebo*、古プロシア *siraplis*, *sirablan*, リトアニア *sidabras*, レット *sudrabs* であり、これらに対応するゲルマン語形はゴート *silubr*, 古アイス *silfr*, 古英 *seolfor*, 古高独 *silbar* である。この語のいろんな相違は、問題点として借用がある未知の言語から個別的行われたことを示唆する。

衣服の一種を意味するゴート *paida*, 古英 *pād*, 古高独 *pfeit* はギリシア *baítē* と比較できるが、これは羊飼いの衣服のことで、ギリシア語では外異の起源のように思われる。「麻」という語は古アイス *hanpr*, 古英 *hænep*, 古高独 *hanaf* で、同じ植物を意味するギリシア *kánnabis* と比較できることは明らかである。しかもこれは印欧系の語ではない。この語形自体が外異の語であることを示しているのである。

この種の事例の数は限られている。我々が認識できるその他の借用は、少なくとも漠然としかわからない時代と状況のもとで、近接の印欧諸語からゲルマン語に行われたものである。

紀元前第5から第3世紀にかけてガリア人が、短期間しか存続しなかったものの、その帝国を築いたとき、彼らはすばらしい文明を有し、隣人たちに影響をおよぼした。ガリア語からゲルマン語への借用は、多分この時期までさかのぼるであろう。

ガリア人が鉄の冶金に、大変長じていたことは知られている。だから「鉄」というゲルマン系の語——ゴート *eisarn*, 古アイス *isarn*, 古英 *isern*, 古高独 *isarn* がケルト語起源であるのは不思議ではない。ケルト語形はガリア *isarno-* であって, *Isarno-dori* 「鉄の扉」, アイルランド *iarn*, ウェールズ *haiarn* などの形で保存されている。

「王」を意味する印欧語はサンスクリットとイタリック・ケルト語派にしか保存されていない。すなわちサンス *rāj-*, ラテン *rēx* (属格形 *rēgis*), 古アイル *rī* (属格 *rīg*) である。この語は *ē* を有し, それをケルト語は *i* に変えた。それがガリア *rīg* (*Dumnorīg-* などに見られる) である。ゲルマン語はこの *i* のついたケルト語を, 子音変化以前に借用した。すなわちゴート *reiks* 「首長; 権力のある」, 古アイス *rikr*, 古英 *rice*, 古サク *riki*, 古高独 *rihhi* (すべて同じ意味) である。「王」を意味する本来のゲルマン語は, この言語の要素でつくられた二次的な派生語である。ラテン *dominus* 「家長, <sup>あるじ</sup>主」が *domus* 「家」から由来したように, ゴート *piudans* 「王」は *piuda* 「国民」の派生語である。そして一方では古アイス *konungr* 「王」, 他方では古英 *cyning*, 古サク *cuning*, 古高独 *kuning* は「部族」をあらわす名詞のゴート *kuni* などから由来したものである。

ガリア語 *ambactos* 「召使」もまた借用された——古英 *ambeht*, 古高独 *ambaht* であるが, 古アイスランド語には *ambätt* 「女の召使」という女性名詞しかない。ゴート語は通俗語源解釈 (*étymologie populaire*) によっ

て、動詞前接辞の *and-* をつけて、その語をゲルマン語化し、*andbahts* とした。この語はドイツ語では大きな幸運にめぐまれた。古高独 *ambaht* 「奉仕、業務」は周知の語 *amt* 「公務、役所」となったからである。

こうした前提のもとに、ゲルマン語とケルト語に共通に見られる数々の文化用語は、ゲルマン語では借用語だということが明らかになる。そういうわけで、ゴート *lekeis*, 古英 *læce*, 古高独 *lāhi* のような「医者」という語は、ガリア *\*lēgyo-* (この場合 *ē* は古い二重母音の再現) からの借用語であって、アイルランド語は *liaig* 「医者」を保持している。

ローマ帝国はライン川とドナウ川まで伸びていたが、長い国境地帯ではゲルマン語の原住民と接触していた。帝国時代を通じてローマの商人で、ゲルマン人の間で交易した者もあり、またゲルマン人の中には、ローマの軍隊に勤務した者もあった。ゲルマニアに対するローマ文明の影響は絶大であった。その後もたらされたのはキリスト教であり、宣教師によって各地に伝道されたが、彼らのラテン語は文化語であった。こうして多くのラテン語がゲルマン語の中に入った。

ゲルマン語の統一性は、このような借用が行われた時代にはくずれていた。しかしゲルマン諸語はまだ互いによく似ていて、語は方言から方言へと通過して順応した。というのは、話し手は語形を各方言に適応させるのに、どのように移し変えをすべきかを意識していたからである。ラテン語からの借用語がケルト語からのものとはちがって、共通ゲルマン語の子音変化以後（そして古期高地ドイツ語特有の変化以前）のものであるということから、その新しさが示唆される。しかしそれは完全にゲルマン語化され、語頭の強さアクセントをもつようになった。幾つかの例から、使われた手順がわかるであろう。

ラテン *catinus* 「皿、鉢」には派生語 *catillus* があった。これから由来したのがゴート *katile* (複数属格), 古アイス *ketell*, 古英 *cytel*, 古高独 *kezzil* 「釜」として保存されているゲルマン語である。

「ロバ」は地中海地方の動物である。古代印欧民族の世界では知られていなかった。ゲルマン人はその名称をラテン *asellus* から借用したので、ゴート *asilus*, 古英 *esol*, *eosol*, 古高独 *esil* などとなった。

ラテン語の *arca*「箱」から由来したのがゴート *arka*, 古アイス *ork*, 古英 *earc*, 古高独 *archa* である。

ラテン語の影響がもたらした重要性を、もっとも明瞭に立証するのは、行為者名詞 (*nom d'agent*) の接尾辞である。ラテン語接尾 *-ārius* はロマン諸語に導入されたが、イタリア語では *-aio*, フランス語では *-ier* という形で現れる。ところで、ゲルマン諸語は *scola*「学校」に対する *scolārius*「学生」(古高独では *scuola* に対して *scoulāri*) のように、この種のラテン語をかなり多くもつようになったので、その接尾辞は全域で生産的になった。ラテン *liber* : *librārius* をモデルにして、ゴート語は *boka*「文字」, *bokos*「書物」から、*bokāreis*「書記, 筆写生」をつくった。また同様に、*laisjan*「教える」から *laisāreis*「教師」がつくられたのは、古期高地ドイツ語に *lēran* から出た *lērāri* があるのと同じことである。その接尾辞はゴート語では、ほとんど用いられなかったのに反し、ローマの影響が直接に働いた地方、すなわち西ゲルマン地方では常用された。ラテン *-ārius* の借入は比較的后代であったので、ゲルマン語はもはや *ā* を *ō* に変えることをせず、新たに *ā* を有するようになった。強勢のない音節でゴート *a* (つまりここでは *ā*) = 古高独 *ā* の対応は、借用された *-ārius* の新しい性質を示すのに十分である。

ローマ教会の影響は表現法の借用を通じて時々あらわれる。合成語のゴート *arma-hairts*, 古高独 *arm-herz*「情深い」はラテン合成語 *miseri-cors* の明らかな模写 (*calque*) であり、それなりにローマの影響の強さを立証する。ところで、この種の模写はキリスト教の用語に対して、ゲルマン語の同義語を見出そうと、人々が努力したことを物語る。たとえば「断食する」をあらわすのにゴート *fastan*, 古アイス *fasta*, 古英 *fæstan* という語——つまり字義的には戒律を「固く守る」という語が採用された。これは古い異教

徒的な語であるが、疑いもなくキリスト教的な翻案によって保たれたものである。

さらにギリシア正教会（東方教会）の宣教師たちもいたが、語彙に対する彼らの影響は西ゲルマン語にしかあらわれない。そこではギリシア語由来の、幾つかのキリスト教用語が見られる。たとえば古英 *cirice*, 古サク *kirika*, 古高独 *kiricha*「教会」は (*tó dōma*) *kuria-kōn*「主の（家）」というギリシア語からである。ゴート語 *aikklesjo*「教会」は文語のギリシア語 *ekklēsīa* を学者語風に書き替えたものである。

このような外異の影響はすべて、古代のゲルマン諸語に多数の文化用語をもたらした。しかし全体としては、この諸言語の語彙は何よりも先ず、それまで保存されてきたか或いは変形された印欧語要素から成り立っている。外異の要素が言語の中に浸透したのは、その発達が比較的進んだ時代になってからである。特に英語はノルマン人の貴族階級、教会および中世の学問の影響で、ラテン語とフランス語の充満した言語となったので、現代英語の語彙の半分はラテン・ロマン語系である。

英語ほど大規模なラテン語やロマン語の影響を受けなかったにしても、その他のゲルマン諸語もことごとく多くのラテン語を受け入れた。古期高地ドイツ語はラテン *scribere*「書く」を借用するまでに至り、強変化動詞 *skriban* をつくった（「読む」と「書く」を意味する共通ゲルマン語の単語は存在しない）。それでドイツ語ではラテン語とロマン語の語数は、19世紀の終りまで増大した。

西洋を通じて中世の共通学者語であった、ラテン語の作用を特にうけて、ゲルマン語詞はそれに相当するラテン語詞の意味を十分にもつようになった。またラテン語をもとに模写されたものもある。たとえば古高独 *gi-wizzani*「良心」（現独 *gewissen*）は、ラテン *conscientia* をもとにつくられた。ゲルマン語の語彙は、固有の要素から成り立っている場合ですら、さらに全面的にラテン語の浸透作用をうけた。このようにして、共通ゲルマン語の語

彙から現代ゲルマン諸語のそれまでは、その外観にもかかわらず、非常なへだたりがあるのである。

現代ドイツ語のきわめてゲルマン語的な外観は、人を欺くものがある。語の使い方は大部分は、相応する中世ラテン語または現代フランス語の語詞の用法を移しかえたものである。語構成の多くは単なる模写である。Eindruck, ausdrück のような語は、ゲルマン語の要素ではあるが、フランス語の impression, expression となんら異なるところはない。これら自体がラテン impressiō, expressiō にわずかに手を加えたものにすぎない。このように、ドイツ語の単語はゲルマン語の仮面をつけた、大部分ラテン語やロマンス語の単語である。フランスと同じように、ドイツはカロリング王朝の復興に参加した。西ヨーロッパ全土とともに、ドイツは学者語として近代直前までラテン語を用いた。ローマ帝国の滅亡は文化の大きな下落のみならず、それと同時に中部および北部ヨーロッパ固有の文明伝統との接触による冷却をもひき起した。しかし西ヨーロッパ文明は、ローマ帝国のそれをひきついだ。それ故ドイツ語は文明語としては、大幅にゲルマン語の組織の中に移植されたラテン語である。スカンディナヴィア諸語は、最初のうちはもっと抵抗があった。なぜなら北欧世界は古い伝統と、古いゲルマン的慣習をより多く保持していたからである。しかし中世時代のうちに、それらも次いで屈した。

## 2. 合 成

印欧語は一つの語をつくるのに、二つの語幹——第一のものは無変化、第二のものは変化——の組合わせを大幅に用いた。このようにして、ラテン語には in-iustus「不正な」、bi-pes「二本足の」、agri-cola「土耕の」などのような合成語がある。この種の合成語には、特徴となる一定の形式があった。たとえばラテン terra「土地」に対する ex-torris「土地を捨てた」では、形容詞であることを示す接尾辞と同時に、単一形の e に対する o のような母音交替 (alternance vocalique) もみとめられる。

この方法はとりわけ文明語では役立ったので、古代印欧文明が有史時代のはじめ以来、もう殆んど反映していないゲルマン語には、それは僅かに保存されているにすぎない。ラテン *in-ops* 「力のない」、*quadru-pes* 「四つ足の」、*prae-ceps* 「頭から先の」のような、いわゆる「所有格」タイプは殆んどあらわれていない。またギリシア *phugo-ptólemos* 「戦を避ける、臆病な」のように、最初の語が動詞のタイプは存在しない。のみならず、この言語の構造に干渉した諸変化は、そうした手順を大いに不明瞭にした。たとえば印欧語の一般的規則によると、合成語の最初の語の語尾要素は語根母音ゼロであった。したがってゴート *ni*、古高独 *ni-wiht* (字義的には「何一つもない」、現独 *nicht*) にはつきりと保存される否定辞 *\*ne* に対して、合成語の前半の形は *\*n-* であって、ギリシア語では *a-*、ゲルマン語では *un-* となった。ゲルマン語の観点からすると、*un-* はもはや *ni* とは明瞭な関係をもたない。こういうことから、ゴート語には一方では *ni kann* 「彼は知らない」、また他方では *un-kunps* 「未知の」があるとしても、この二つのタイプにはもはや何の共通点もないということになる。現代ゲルマン諸語では、*un-* はもう合成語の前半をつくる語ではない。これは肯定的な意味を、否定的なものに変える接頭辞である。それは独 *richtig* 「正しい」に *un-richtig* 「正しくない」を対立させるときなどに役立てられるのである。

ラテン *cum* 「～と共に」とは同意味のゲルマン *ga-* のような複合の古い第一要素は、合成語にしか残存せず、そのため個性をまったく失っている。独 *gebirge* 「山脈」のような語では、*ge-* は *berg* 「山」に対して、まとまった全体をあらわす接頭辞である。これはもう合成語ではない。そして独 *gleich* 「同じ(く)」や英 *alike* のような語では、*\*ga-lika* 「共に似た」という古い複合さえもう気づかれない。

したがって印欧語型の合成法は、ゲルマン語では役割を演じなくなった。その名残が存在するかぎり、この言語はもはや真の合成語を知らないことになる。

有史時代のゲルマン諸語、特にドイツ語で数多く見られる合成語は、タイ

プが新しく、新しい言語構造から生れた。印欧語の文が自由に配列された、自立的な語からなり立っていたのに反し、ゲルマン語の文は、ある定まった順序で並べられた語群からなり立つ。英語では all good old men のごとき語群全体が、all good old men's works のような語群で所属のしるし s をもつことによって、その統一性がはっきり示される。ドイツ語で die junge frau は拘束された一群を形成するので、どれ一つとして置きかえられない。ところで他方では、ゲルマン語の文中で語の自立度は、アクセントの相対的な強さによって示される。つまり他の要素に従属する要素は、アクセントの強さが少ない。定まった具合に配列され、異なった強さでアクセントの置かれる語は、ある一つの概念をあらわすのに適する。たとえば独 eine junge frau という語群では、二つの違った概念がある。ドイツ語がその音韻形態的構造に従って、当然ながら jung を frau に結びつけてできた語は、古高独 iunkfrouua (frouua にアクセントのあることは確認される)、現独 jungfrau であって、その意味は ラテン puella「娘、少女」と同じである。フランス語も同様な手順をふんだ。たとえ二語で書かれても、jeune fille は一語であり、ただ一つの概念をあらわす。しかもこれは実際そうなので、日常口語では《C'est trop jeune fille》(「これはとても小娘だ」)といえるほどである。もし二つの要素 jung と frau が、一方は主、他は副というように各々アクセントを保持するならば、語は合成語としてとどまり、半結合のままでも二語は話し手にとっては、別々に感じられる。これが独 jungfrau の場合である。ところが、もし逆に語が完全に結合して、言語の一般的規則——この場合は語頭音節が強められて、その他は犠牲になる——に従うとすれば、結果は独 jungfer「乙女」のような形となるだろう。ここでは第一要素ははっきり残っているのに、第二要素は不明瞭になっている。特にこの場合、ドイツ語は同時に jungfrau と jungfer の二語を有している。

このようにしてできた合成法は、語構成の柔軟で便利な方法をゲルマン諸語に提供した。合成語がまったく一語として扱われるときは、後半部はその意味も音韻的な実体をも失う。つまりそれは接尾辞の機能しかもたなくなる



傾向がある。こうしてできたのが独 *-heit*, *-tum*, *-lich* などと同じく、幾つかの重だった接尾辞である。二つの語が各々個性を保持するとき、その融合度の限りなく変る語がつくられる。独 *zeitschrift* 「定期刊行物」のような常用語では、二語はやっと認められるにすぎないが、他方ではこの種の新しい語構成は、二つの語のことをはっきりと意識するときのみ理解される。専門語は新語づくりの無限の手段をこの方法に見出す。

### 3. 印欧語要素の変形

印欧語時代から保存された語や構成タイプは、ゲルマン語の発達には十分でありえなかった。

すでに見たように、言語のタイプの一般的変化と、音韻的ならびに意味的变化は、印欧語の語構成法をますます不明瞭にさせたので、これは新しい手順におきかえられるようになった。

形が極度に縮小された接尾辞は、もっと大きなものにとり替えられた。次の例はその手順について、一つ概念を与えてくれる。

印欧語には行為をあらわす名詞をつくる接尾辞 *\*-teu-* があった。語根 *\*geus-* 「味わう」からは、ラテン *gus-tu-s* 「味わうこと」ができた。これに対応するゴート語は *kustus* 「試み、検査」である（動詞 *-kiusan* 「ためす」、*kausjan* 「味わう、しらべる」の別形）。したがって接尾辞 *\*-teu-* の再現形は、ゲルマン語にないわけではない。ところが、この接尾辞は形が簡単のために、新語をつくらなくなった。他方ではゲルマン語は *\*-atjan* に終る型の派生動詞を発達させた。たとえばゴート *lauh-atjan* 「輝く」、古高独 *lohazzan*, *laugazzan* 「燃える」などのように（この諸形はゴート *liuhap* 「光」として現われる語根 *\*leuk-* から由来）。さてこれらの動詞の *\*-at-* に接尾辞 *\*-tu-* を加えると、*\*-assu-* ができるが、*-t+t-* はゲルマン語で *-ss-* となるからである。したがって *\*ebnaz* 「等しい」から動詞 *\*ebnatjan* 「等しくする」（古英 *emnettan* で立証）ができるから、その名詞形としてゴート *ibnassus* 「等しいこと」、古英 *emness* がつくられるだろう。この名詞は形

容詞\*ebnaz に対する抽象名詞としてあらわれる。だからゴート horinon 「姦通する」という動詞から、抽象名詞 horinassus 「姦通」ができる。そしてこのような語から、ゴート接尾辞 -inassus をとり出すことができるだろう。これは明瞭で、形もきわめて大きいので生産的である。つまりゴート blotan 「尊敬する」から blotinassus 「礼拝」が、同様に古期英語では ehtan 「追求する」から ehtness 「迫害」が、gōd 「良い」から gōdness 「善」がそれぞれ派生する。この接尾辞は英語で現在まで存続し、goodness がその例である。

今手短かに説明した種類の手順によって、ゲルマン語が獲得した接尾辞は、比較的明瞭で形も大きいですが、これだけが唯一のものではなかった。ゲルマン語の歴史の中で、もう一つの手順がさらにもっとはっきりした接尾辞をもたらした。二つの名詞を組合わせて一つの名詞にするという、いわゆる合成法はゲルマン語が印欧語から受けついだものである。それで、たとえばゴート haidus 「仕様、方法」、古アイス heiðr 「格式」、古英 hād および古高独 heit 「状態、地位」のような語をとりあげてみよう。これらはサンスクリット ketúh 「しるし」に対応するもので、古高独 magat-heit 「乙女の状態」、古英 mæden-hād (同) のような西ゲルマン語の合成語では、第二辞項として用いられた。これをふくむ合成語は幾つか存在したが、古英 hād、古高独 heit には抽象的な意味もあったため、この語はそれ本来の意味を失って、英 maiden-hood では -hood が接尾辞として機能している。ドイツ語ではこれに相当する -heit がきわめて生産的な接尾辞となった。ゲルマン諸語ではこうした手順は大きく発達するようになり、ドイツ語では -tum のようなものをふくめて、重要な接尾辞が他に幾つかできた。

派生法だけが一新された唯一のものではなかった。多くの概念は必ずしも変化の理由がわからぬままに、新しい名称をもつようになった。

たとえば、ある身体部分の名称などは、従来のものがなんらかの禁止の対象になると、新しいものに姿をかえるか、とって代られることになる。この

ようにして、「不吉な眼」の迷信によって、「目」というそれまでの名詞が、幾つかの印欧語では別の名におきかえられるか、または形を変える結果ともなった。リトアニア *akis*, 古スラヴ *oko* の形はとても正確に伝えているのだが、ゲルマン語の名称、つまりゴート *augo*, 古アイス *auga*, 古英 *ēage*, 古高独 *ouga* はもとの語形を思い起こさせるだけである。とすれば、この場合わざと改変が行われたのであろう。すなわちこれには、「耳」という語の影響は無縁でないにちがいない——というのはゴート *auso*, 古アイス *eyra*, 古英 *ēare*, 古高独 *ōra* (*ō*は *r* の前では *au* を再現。ノルド語と西ゲルマン語では、ゴート語の *s* に対して *z* が再現) を比較のこと。さらにリトアニア *ausis*, 古スラヴ *uxo* をも参照のこと。同様にラテン *caput* 「頭」に対応する形は、古アイス *hōfoð*, 古英 *hafud* として保存されている。ところが「頭」という名称は、印欧の各言語で異なる。ゲルマン語では古い名称が古アイス *hūfa*, 古英 *hūfe*, 古高独 *hūba* 「帽子」という一連の語との混成 (contamination) のために変形した。その結果、ゴート *hauþip*, 古アイス *haufuð*, 古英 *heafod*, 古高独 *haubit* となった。また「手」の名称も印欧諸語では様々である——サンス *hāstah*, ギリ *kheír*, ラテン *manus* リト *rankā* のように。ゲルマン語は独自の語を有する——ゴート *handus*, 古アイス *hond*, 古英 *hond*, 古高独 *hant* などであって、おそらくゴート *-hinþan* 「つかむ, 狩で捕える」とは同系語であろう——リト *rankā* が *renkū* 「寄せ集める」と同系であるように。

不規則なタイプの語形は、少しでも使用がひんばんでないならば、除去されようとする。たとえば印欧語根 *\*pō(i)-*, *\*pī-* 「飲む」 (ギリ *pī-nō* 「私は飲む」, ラテン *pōculum* 「杯」などに見られるもの) の動詞形は、サンス *pībati* 「彼は飲む」, 古アイル *ibid*, ラテン *bibit* のようなその後の形でわかるように、きわめて特異であった。大多数の言語では、それらは消滅するかまたは正常な形にされた。この場合ゲルマン語も固有の動詞をもつ。外観はとても印欧語的であるが、この語族以外のどの言語にも対応形がない——ゴート *drigkan* 古アイス *drekka*, 古英 *drincan*, 古高独 *trinkan* のよう

に。

短かい語は二次的な接尾辞によって拡大される。たとえば「犬」というもとの印欧語はサンス *ç(u)vā* (属格 *çūnaḥ*)、ギリ *kúōn* (属格 *kunós*)、古アイル *cū* (属格 *con*)、リト *šū* (属格 *šuñs*) の形で、明瞭に維持されているが、ゲルマン語では *\*hun-da* として再現される。すなわちゴート *hunds*、古アイス *hundr*、古英 *hund*、古高独 *hunt* である。

ある一群の語は特殊な意味をもつようになって、もとの意味が制限、縮小される。たとえばサンス *riṇákti* 「彼は残す」、ラテン *linquit*、ギリ *leípō* 「私は残す」、リト *lėkũ* の印欧語根 *\*leikʷ-* は、ゴート *leihwan*、古アイス *liā*、古英 *lēon*、古高独 *lihan* の形で維持されるが、これらは単に「貸す」という意味である。この語根は印欧語時代以降、ある価値をもった伝達を意味するように用いられた。それゆえ古アイス *lān* 「貸金、ローン」、古英 *læn*、古高独 *lēhan* のような名詞は、サンス *rékṇaḥ* 「相続」と比較することができる。ゲルマン語はこうした特殊な意味を保存したにすぎない。語根 *\*leikʷ-* の意味の一部分、つまり「残す」という意味は、別の古い語根 *\*lēd-* でもあらわされた。それから出たものとしては、ゴート *letan* 「そのままにする」、古アイス *lāta*、古英 *lætan*、古高独 *lāzan* およびゴート *lats* 「ゆるんだ」、古アイス *latr*、古英 *læt*、古高独 *laz* である（比較：ラテン *lassus*）。もう一つの意味「残る」は、語根 *\*leip-* 「くっついて離れない（でいる）」から出たゴート *bi-liban* 「とどまる」、古英 *belifa*、古高独 *bi-liban* およびゴート *af-lifnan* の形であらわされた（比較：古スラヴ *lipěti* 「くっついていて」、ギリ *lípos* 「脂肪」も同系）。この語根から状態をあらわす動詞が、特殊な意味をもつようになった。ゴート *liban* 「生きる」、古アイス *lifa*、古高独 *lebēn*、古英 *libban* がそれである。この一連の動詞はサンス *jīvati* 「彼は生きる」、古スラヴ *živetŭ*、ラテン *uiuit* としてあらわれる印欧語動詞、つまり不規則な形を有し、言語ごとに異なった外観を呈していたものにとって代ることになる。

多様で細部の無限な作用によって、ゲルマン語はその語彙の印欧語要素を

ほとんど変形した。そしてその形態と意味を変更し、大抵の場合ある程度の改新を行なった。もしゲルマン語彙に関する伝承されたデータが皆無だったとしたら、我々は古代印欧諸語の語源辞典だけを頼りとして、ゲルマン語の文献解釈には甚だ困ることになるであろう。

印欧語の語彙、すなわち政治、法律および宗教のことに意を用いた特権階級の語彙が、ゲルマン諸語で順応したり、別の語に置きかえられた経緯は、「女」を意味する語の歴史に徴して明らかである。印欧語には不規則な変化をする語があった。ゲルマン語はその二つの変化形を保持した。二つとも（変化は）正常化され、意味的に区別があった。語基の交替形 *\*g<sup>w</sup>en-* と *\*g<sup>w</sup>on-*（これからアイル *ben* とギリ *gunē*）から、ゲルマン語は *-n-* を有する派生語をつくった。つまり一方ではゴート *qino* (*qinakunds* や *qineins* 「女性の」はここから)、古サク *quena* など、また他方では古アイス *kona* など「女性の人」の意味である。ヴェーダ *-jāni-* に対応する、母音 *ē* のある形から、ゲルマン語は「結婚した女」を意味するゴート *gens* のような *-i-* 語幹をひき出した。「女性の人」という語はさらに発展し続けて、英 *quean*、スウェーデン *kona* では「あばずれ女」という意味をもつようになった。これに反して「既婚婦人」という語は、英 *queen* 「女王」をもたらした。「女性の人」をあらわすのに、ゲルマン語は他方では起源不明の中性名詞をとり入れた。すなわち古アイス *vif*、古英 *wif*、古高独 *wib* である。次いで英語は *wife* 「既婚婦人、妻」と *woman*（もとは *wif-man*) 「女の・人」とを区別するようになった。

#### 4. 結 論

方言的な起源からすれば、ゲルマン語の語彙はギリシア、アルメニア、インド・イラン各言語の語彙よりも、バルト・スラヴ、ケルトおよびイタリック諸言語のそれに近い。ゲルマン語の語詞が他言語で対応を求められるときは、後者のうちのどれか一つに見出される。たとえばゴート *tiuha* 「私は引く」はラテン *dūcō* の形で、ゴート *hals* 「首」はラテン *collus*, *collum*

の形でしか見つからない。また他方ゴート *haims* 「村」は古プロシア *caymis*, リト *kaimas* の形で、またゴート *hails* 「健康な」は古スラヴ *čelŭ* (および古プロシア *kailŭstikan* 「健康」) の形以外は見つからない。

ゲルマン語は印欧語彙のうち支配階級層の語を多く保存しているとはいえ、ラテン語と同様に大衆的起源のものと思われる語形も数多く保有する。たとえばゴート *bi-laigon* 「なめる」に対して、西ゲルマン語は古高独 *lecchōn*, 古サク *likkōn*, 古英 *liccian* を示す。サンス *kṣam-* やギリ *khthon-* があらわした「大地」という儀式的な語は、むしろ「耕作できる土地」という意味の、技術的性質の語から出たゴート *airpa* などに置きかえられた。「天上の」神とは対照的に、字義的には「大地の」という派生語のゴート *guma*, ラテン *homō*, リト *žmū* にしか、儀式的な名称の名残は存しない。早くから印欧民族の古いタイプの文明は、ゲルマン人の世界では消滅の方向へとむかったのである。

多くの外異の影響は語彙にあらわれる。そのうちのあるものは、未知の言語地域住民の影響——例えばゲルマン語が「銀」という語 (ゴート *silubr*) を借用したような場合——を示すことがある。ケルト語はある時期に重要な語をもたらしたが、古英 *mearh*, 古高独 *marah* およびウェールズ *march*, アイル *marc* 「馬」のような語に関しては、ゲルマン語とケルト語の双方が影響されたかも知れない未知の同一言語から、多分個別に借用が行われなかったかどうか、といった疑問も生じる。次いで到来したのは、特にライン地方経由では、ラテン語とギリシア語の形での古典文明の影響であった。明らかに第4世紀以降、キリスト教徒の言葉はギリシア語 *kurikē* から、「教会」という西ゲルマン語詞をとり入れた——古高独 *kiricha*, 古サク *kirika*, 古英 *cirice* などのように。さらにゴート *hails* とその派生動詞 *hailjan* 「病を直す」などが古いゲルマン語だとしても、古高独 *heilazen*, 古英 *hālettan* などがつくられたのは、ラテン *saluvāre* 「治療する, 救済する」を訳すためである。厳密な意味での借用によったり、ゲルマン世界に影響した文明語の意味が動詞に浸透するなどして、ゲルマン語彙にギリシア・ラテ

ン語の諸要素が行き渡った経緯は、この場合最初から目につくのである。

共通ゲルマン語は殆んどすべて印欧語要素ででき、その文法もまだ多くの印欧語的特徴をそなえていたが、実際にはすでに新しい体系であった。それが呈した改新をなおも発展させながら、それから分化した諸方言は、ますます印欧語から離れた状態に達した。その結果、最も保守的なドイツ語の一群でさえ、印欧語の文法とは全く違った文法と、外異の語や意味の浸透をうけた語彙を有している。しかも歴史的事情が発展を加速した場合には、印欧語的なタイプとしてとどまるものは殆んど何一つなくなった。英語では発音は著しく特異であり、文法は印欧語のタイプからはあらん限り遠ざかっていて、語彙は古い意味をもった古い用語を、もはやごく僅かにしか出現させない。英語は印欧語とは、歴史的な連続性によって結ばれているが、印欧語のタイプは殆んど何一つ保持していない。

印欧語の各々は、最初の共通語から独自の発展を示す。印欧語の各語派がとって代るようになったそれ以前の言語に固有な用法を、ある程度反映する固有の傾向を、我々はその各々において察知する。こうした独自の発展が、ゲルマン語の場合ほど明らかに認められるところは他にはない。ある前段階の言語から発すると思われる傾向が、それほどはっきりと垣間見られるところは他にはない。さらに以前の印欧語彙が変化し、豊かになり、新しい文明の必要性に順応するようになった経緯を、これほどよく見られるところも他にないのである。

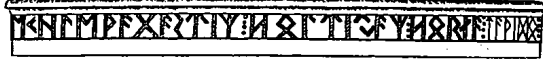
---

## 訳 者 註

- 1) 古代インドのバラモン教聖典の総称。
- 2) 古代ペルシアのゾロアスター（ザラースシュトラ）教の聖典。
- 3) この三区分は今では、それぞれ「東ゲルマン語」、「北ゲルマン語」および

「西ゲルマン語」と呼ばれるのが普通である。

- 4) たとえば有名なものは、デンマーク Gallehus の黄金の角杯<sup>つのさかずき</sup>に刻まれた碑文。  
次のように読める。



‘ek hlewagastiR holtijaR horna tawido’ 「我ホルトの子フレワガスト角杯を作れり」。

- 5) 『ノルド語は語末の\*-z を r に変えた。これはルーン・アルファベットでは、従来の r 音を表記するのとは異なった、特別の文字で書きあらわされた。これに対する転写文字は通例 -R である。』(原書82頁) また『ルーン・アルファベットには、\*z から由来した r を表わすのに、本来の r を表わすのとは違った文字がある(この文字を我々は R によって転写している)。』(同47頁) と著者が述べているルーン文字は Y のように書かれた。この文字の名は algiz 「ヘラ鹿」と言った。およその音価は [r] と [ʒ] の中間音と推定される。現実にこの中間音を持つ言語は、たとえばポーランド語やチェコ語である。
- 6) C.J.S.Marstrander [マシュトランデル] ノールウェイのルーン文字学者(1883-?)。ここではその論文 *Om runene og runenavnenes oprindelse* 「ルーン文字とルーン名称の起源について」(Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap, vol.I, 1928, P.85 ff.) のことに言及するか。
- 7) Camille Jullian (1859-1933) フランスの歴史家。